

# かずさの博物誌

## オオヨシキリ

真っ赤な口を開け  
大声でさえずる

文・写真／成田篤彦

4年前の5月中旬、小櫃川の土手のそばで「ギョッ、ギョッ、ギョッ、ギョッ……」と、丈の高い枯れたヨシの茎で盛んにオオヨシキリがさえずっていた。近寄ると素早くヨシ原の下部に隠れた。耳を澄ませば流れの近くのヨシの先端でも、上流の柳の枯れ枝でも、下流のノイバラの先端でも、川面の上にある電線でもさえずっていた。外のオオヨシキリの鳴き声が激しくなると我慢しきれないよう、再び、高い茎に跳びながらよじ登り、声を張り上げ猛烈にさえずりはじめた。ヨシの枯れ茎が風に大きく揺れても真っ赤な口を開け、ギョギョシギョシケケケと甲高く必死にさえずる。別のオオヨシキリ

が近付くと急いで追いかけてヨシ原の上空すれすれに飛び去って行った。この彼らのふるまいは後からやってくる雌を受け入れるために雄同士が互いに争いながら縄張りを造っているのであるが、「まあなんと騒々しいことか」とあきれしてしまう。このありさまを詠んだ「行々子あまりといひばはしたなき 井上井月（風信子著2008年『俳句と詩歌であるく鳥のくに』文一総合出版）」という句の行々子とはオオヨシキリのこと、やかましく鳴くことからこの名が由来している。だが、晴れ渡っていて緑色のヨシ原が広がり、その中に点々とセリ科の白い花が咲きオオヨシキリの鳴き声以外何の物音もしない。もし、小櫃川がもつと川幅が広く水量が多ければ、「行々子大河はしんと流れけり 小林一茶（風信子著前出）」の句にふさわしい趣のある光景になると感じた。

さて、かれらはユーラシア及びアフリカ北西部で繁殖し、東南アジア及びアフリカ熱帯域にわたり越冬する。国内では夏鳥である。夕刻、小櫃川付近の住宅に囲まれた小規模なヨシ原で3羽が盛んにさえずっていた。しかし、例年、真っ先にさえずり始める河川敷ではさえずっていない。「なぜ、さえずらないのか？もうすでに河川敷の雄は雌とつがいになっているのでさえずる必要がないのか？それとも河川敷では子育てに不都合なことがあるのか？そう言えば、この2・3年、この時刻、近くの電柱やヤナギの大木にオオタカの成鳥や幼鳥が止まっていることが何度かあった。」と思っていると偶然であるが、夕日に照らされて、オオタカが一羽対岸の河川敷から一直線に山へ向かって飛び去った。脚には小鳥が一羽握られていた。天敵の猛禽類も増えているのであろうか？

話は変わるが、双眼鏡を持って毎日、土手を歩いているのが気になったのか熟年の農家の方が「何を調べているのかね？」と話しかけてきた。「オオヨシキリを調べにきたので

す。」と答えると「以前はこの河川敷のヨシ原はなかった。昭和48年（一九七三）に農業用水と水道用水を確保するために下流に小櫃堰が造られたから、土砂が次第にたまるようになって、ヨシ原ができた。」と教えてくれた。最近ではヨシ原などの湿地が各地で減少し、そこに棲む鳥類が著しく減少しているのに、ここでは新たな湿地ができ、オオヨシキリなどの鳥類が増えてきている。いずれにしても彼らの生活は我々の環境変化によって左右されているのに違いはない。

### 〈参考文献〉

○千葉県の保護上重要な野生生物千葉県レッドデータブック―動物編2000版、浦野栄一郎1997「オオヨシキリ」日本動物大百科鳥類Ⅱ 平凡社



©成田篤彦

▲オオヨシキリ ウグイス科 夏鳥。雄が先に渡ってきてヨシ原に縄張りを造り、4月後半から8月にかけて一夫多妻で繁殖。かずさの河川敷、休耕田などの小規模なヨシ原にも生息(2009年4月筆者撮影)



©成田篤彦

◀クモをくわえるオオヨシキリ 垂直のヨシ茎に止まるときには、上に向けた脚を胸元にひきつけるように折り曲げ体のバランスをとる。千葉県指定一般保護生物(2008年7月筆者撮影)



©成田篤彦

▲オオヨシキリの生息地 河川敷にヨシ原が広がる(2006年5月筆者撮影)